



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	影の影 : プラトンの著作に関する一考察
Author(s)	水野, 一
Citation	北海道大学人文科学論集, 9, 33-44
Issue Date	1972-12-08
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34299
Type	departmental bulletin paper
File Information	9_P33-44.pdf



影の影

——プラトンの著作に関する一考察——

一

哲学の肝心の問題については、私は何も書かなかったし、将来も書かない。なぜなら、それは元来語り得ぬものだからである、という意味の事がプラトンの第七書簡の中に見える。⁽¹⁾ また、彼は三十篇あまりの作品を残したにもかかわらず、書物の価値を割引く議論を展開している。一体彼は何を書いたのか。著作の目的はどこにあったのであるか。彼は、もの書く業は「流れに記す」⁽²⁾ が如きものだとも言っている。重ねて言うが、現にプラトンの著作として星霜を経て伝えられているものを、我々はどうか受けとればよいのであろうか。

彼には「不文の教え」というものがあって、アカデメイアの学徒は直接に聴く事が出来たと言われている。ここにこそ彼の哲学があるという見方も成り立つかもしれない。しかし、もしそれが講義のような教授形式で語られたとすると、この「不文の教え」もまた、書物と同様に一方的な論述であって、プラトンの言うような、対話の間に哲学の芽を育てる底のものではなかったのではないかと疑われる。案の定、プラトンの『善について』という講義を聴いた人々の大方は、当初の期待を裏切られて途まどいの念を禁じ得なかったと伝えられている。⁽³⁾ 講義とは別に、彼が日頃、弟子達と哲学について語り合った事は疑うまでもない。しかし、それは伝えられぬまま消えて行つた。孔子を中

水野

一

心として行われた対話の記録である『論語』、それに相当するものがプラトンにはない。「求は退く。故に之を進めたり。由は人を兼ぐ。故に之を退く」という風な、異なる話し相手と情況の下での生きた問答を窺い知る事は、プラトンの場合できない。結局、我々は今に残る彼の著作に依存するしかないのである。

ところが、プラトンには書物蔑視の意見があるので、どうしてもこれを検討してみなければならぬ。もっとも、書く事、そして書物がすべて駄目だと言うのではないように思われる。つまり、彼によれば、書く事自体は何ら恥ずべきことではなく、つまらぬ書きようをするのが恥ずべきことだというのである。つまり、プラトン自身の書物は立派なのであらう。それにしても、つまらぬ事は書くものではないとばかりに足元を見透されては、我々は何も書けないではないか。しかし、すぐ後に救いの言葉が——もし救いと言えらるならばであるが——続く。文章の問題を研究する楽しさ以外に何の生きがいがあるうかと。更に、書物以外に拠りどころを持たぬ文科の書生にとって励みになる言葉が見つかる。即ち、一廉の術知は、ものの本性について精妙にして高踏的な論議を必要とするというのである。

このように、自分に都合のよい語句を拾う事は極めて容易である。というのも、プラトンは対話篇というドラマ形式を用いて、さまざまな見解を登場人物の誰彼に語らせておいて、彼自身がどの見解を支持するかについては関知しないというポーズを執っているからである。その語りの中に、彼の考えがどの程度表明されているのか、或いは、何一つ表明されてはいないのか、いくらでも疑う事が出来る。この疑いが解明されない限り、我々にとっては、どの語句も検討の材料として等しい価値を持つてよいであらう。我々読者もまた読みつつ対話に参加するのである。

プラトン自身、執筆に非常な興味と熱意を持ち、また自ら楽しんでいた事は疑いない。時にはパロディーを試み、また推敲を重ねている。「ロゴスを奪われるとしたら哲学が奪われることである」と言うプラトンのロゴスが、我々の手元に書物の形で伝えられている。書物は誰に読まれ、どんな誤解を招くとも打つ術はない、と言いながらも、やはり彼は書いたのであって、彼は事実上 exoteric な性質の論述を否定していない。しかし、世に発表された書物を、

直ちに exoteric な性質のものと見る事も適當ではない。大衆に訴えるには、一場の演説の方が効果的であろう。對話篇という形式は、一見取り付きやすいようではあるが、決して一般向きのものではない。つまり、プラトンは一つの断案を示して早々に賛同を求めるのではなくて、對話の中に読者を引き入れて惑乱させようとしているのではない。迂遠のようではあるが、迷わせる事が哲学への導きである。元来プラトンは一般大衆向けの書物を書くつもりはないのである。我々は書物の中から esoteric な教えを探し求めなければならないのであろう。⁽¹³⁾ところが、それまた浅はかだとプラトンは言いたいらしく、書かれたものに頼るのは大変なお人好しであると言う。⁽¹⁴⁾

いかにも、我々が既製のものに頼りきるのはあまり賞められる態度ではない。しかし、そういう読者の態度とは切り離して、書物自体の値打ちの方はどうなるのであろうか。生きた言葉、魂を持った言葉があつて、書かれた言葉、つまり書物はその影にすぎないという一節がある。⁽¹⁵⁾この生きた言葉と書かれた言葉の対比は有名である。しかし、それ故に書物はすべて値打ちがないという訳ではなかった。生きた言葉は単に語られる言葉ではない。⁽¹⁶⁾それは「知っている人の言葉」「学ぶ人の魂の中に知識と共に書き込まれる言葉」⁽¹⁷⁾である。また、正、美、善なることどもについての知識が求められなければならないのであるから、生きた言葉は、実は哲学の求める知識と言ひ換えてよい。⁽¹⁸⁾こういう知識を求めながら書くのであれば、もの書く業は慰みではあるけれども本当にすばらしい慰みなのである。⁽²⁰⁾書かれた言葉は影ではあつても生きた言葉（知識）の影像である。⁽²¹⁾つまりぬ書物もあろうが立派な書物もあり得る。彼は「慰みと言つてはいるが、彼の著作は単なる慰みの所産ではなからうし、また、我々にとって貴重な遺産であることにはかわりはない。

二

プラトンの多方面に亘る深い関心とは作品の随処に現れていて、アイデアだけを問題にしている訳ではないが、以下で

は、イデアについての語りにしぼって考えることにする。彼は知識の対象として、イデアをどのように垣間見たのであろうか。案に相違して、イデアについての説明記述はほんの少ししかない。いや、ほとんど無きに等しい。美そのものについては、心も詞も及ばぬと言うばかりである。⁽²²⁾「常に単一の相にとどまるもの」⁽²³⁾については言葉の綾を織りなすことが出来ない。美そのものは突然観得されるであろうと言われるだけである。⁽²⁴⁾「それ自体」とか「常に単一の相にとどまる」という言葉はイデアを表わす極まり文句であって、美のイデアだけに使われるものではない。この極まり文句のあたりにイデア界は集約されて行く。感覚界にこそ多様は見られるのであって、イデアへと近づくにつれて、美、善、正義等の区別は立たなくなつて、ただ、この上なく立派なものとなつて行くばかりである。

百万言を費して語る世界が彼の眼前にひらけた訳ではないようである。彼はただ一言、イデアは「輝く」としか言わない。しかも、この同じ言葉をくり返すばかりである。⁽²⁵⁾少くとも、彼にはそう言い表わすしかなかったのである。善のイデアの如き無条件的な原理については、逐義的な定式化としての論述は元来不可能である。輝きに目もくらむという全く新しい体験と発想は比喩的に物語られるだけである。かくて、有名な太陽の比喩が語られることになる。イデアは人間に対して圧倒的な力を以て迫り、進路を示し、人の心に斬りつけてくる何物かであったのであらう。

このようなイデアの存在をプラトンは信じている。⁽²⁶⁾信じるとは言つても、盲目の信仰とか固陋な信念というものではない。彼は前五世紀の理性主義の中で育ち、生涯、理性的探究の努力を貫き通している。「信」にまつわりがちな思考の固着は彼にはない。彼の柔軟な思索が言論対話となり、著作ともなつた。したがって、信ずると言うよりも、イデアについての或る明瞭な見透しを持っていると言ふべきであらう。あからさまに言えば、形而上学というものは、はじめから原理を洞察しているのである。その上で吟味にかかるのである。イデアの必然を、論理の及ぶ限り解明しようとする言論は、彼にとっては、果てしない海原であつた。人はこの中に落ち込んでただ泳ぎ切るしかない

が、ともすれば陸地を見失いがちなのであった。⁽²⁷⁾ プラトン自身が言論の大海原をさ迷う。『パイドン』の「第二の航海」という試みも同じことである。

イデア論の通例の解説では、たとえば円について、現実を描かれた円と円のイデアとが対比され、いわゆる二世界が示される。しかし、この二世界の対比・関係は、二世界を観望する人間の精神を前提した上で言えることである。魂（精神）はイデア界にも現象界にも、そのどちらにも正式には所属しない無国籍者である。魂はイデアに最も類似したものとされているが、⁽²⁸⁾ イデアではない。実はこの無国籍者である魂が言葉と知識を同伴して現象からイデアへと進んで行く。⁽²⁹⁾

我々の精神はものごとを言葉によって分節的に識別し、判断知識を構成する。しかし、言葉は力弱きものである。⁽³⁰⁾ 蟬の脱け殻のようなもので、百万遍「善」と称え記しても何か善いものが出現する訳ではない。しかし「よさ」を表現する手段としては「善」という言葉にまさるものはない。まさるものはないが完全なものではない。魂がイデアでない如く、言葉も知識もイデアに同化することはない。

プラトンの言を俟つまでもなく、ものごとの完全な表現（模倣）は不可能であって、いかなる表現もものの在り様をそのまま示すものではない。言語表現とは、もののさまざまな現れ方の中から特徴的なパターンを拾い出して、言葉に組み立て直すことである。これが言葉による認識の構成、世界の解釈である。つまり表現と言ひ、認識と言ひても、それは人間の側からする世界の再構成であって、この時、我々は、意識すると否とにかかわらず、一種の虚構を営んでいるという事を反省しなければならない。このような現実離れを冒すことは人間精神の弱点であると言うことも出来ようが、このような精神の構造が文化を生む。

三

ところで、虚構とか模倣の物語にみられる人間の非実践的な欲求などと言えば聞こえはいいが、プラトンによると、詩人の物語は偽りの物語なのである。⁽³¹⁾つまり、神は善なるものとして語られなければならないのに、そうは物語られていないと批難される。彼の詩人批難の根拠はこれだけではない。文芸の本質について考える時、プラトンの批判は適切であるとは言えないし、彼がそれを知らなかったとも思えない。それはさて置き、プラトン自身の著作にしても、虚構という点では詩人の作品と同じことである。

プラトンの描くトラシマコスの言動が実在人物の忠実な描写であることを、我々は求めない。対話篇の登場人物として、一箇の可能的典型であるだけで十分なのである。人物描写に限らず、プラトンが虚構の物語を縦横に駆使していることは事実である。ただし、詩人を批難する彼には、自分の語る物語は詩人のそれとは違うという意識がある。彼も偽りを提唱するのであるが、こんなすばらしい偽りはまたとあろうか、と公言してはばからない。⁽³²⁾彼の物語もまた虚構であるけれども、人を誤らせるものではなくて、人を善導し、真を語ろうとする虚構であり、最も真なるもの、アイデアを志向する文章である。つまり、アイデアの模倣がすぐれた文芸として成り立つのである。いかに立派に語られようとも、私はアイデアを見ないと反問する人もあろう。だが、たとえば、プラトンが言っているように、画家が理想的な人間を描いた時に、現実にはそのような理想的人間の存在を証明できないからと言って、その画家の能力を貶するのは筋ちがいである。⁽³³⁾この箇所は種々論議されるところであるが、真の文芸・創作についてのプラトンの本心と自負がちらつく注目すべき一節であると思われる。現実の模倣から出発したかもしれないものが、いつしか模倣の域を突き破って飛び立って行くのである。

文芸はアイデアそのものを模倣するのではなくて、アイデアを模倣する事物を更に模倣するのであって、真実在から離

れること三番目という低い位階にあるとされる⁽³⁴⁾。しかし。模倣の模倣という説明にはどう考えても無理なところがある。大工はベッドのアイデアを模倣してベッドを作り、画家は大工の作ったベッドを更に模倣してベッドの絵を描く、とプラトンは言っているが、元来アイデアを見得る人は大工ではない筈である。また視覚的芸術を模倣・模写に限定してしまふのは不当であろう。文芸についても同様であつて、模倣の模倣という公式は、線分の比喻や洞窟の比喻を考へ合せると、いかにももつともらしく感じられるかもしれないが、本当はおかしい。プラトン自身の著作も模倣の模倣なのであろうか。そうである筈はない。少くとも、アイデアについての或る見透しを持っている彼が、ことさらアイデアに目を注がないで書くとは思われない。しかし、先に触れたように、生きた言葉があつて、書物はその影である。そして、生きた言葉がいかにアイデアに肉迫しようとも、言葉はやはりアイデアの影である。とすれば、プラトンの作品も「影の影」「模倣の模倣」とならざるを得ない。

プラトン自身、矛盾するような事を言っている。哲学の窮極の問題は言葉で表わすことが出来ないと云つていながら、⁽³⁶⁾それを一度心に把えさえすれば忘れる氣遣いはない、なぜなら、それはこの上なく手短な言葉におさまるものだから、とも言う。⁽³⁷⁾これは心に把える事の不可能を前提にしている訳ではあるまい。手短な言葉でしか言い表わせない、という事であらうか。或いは、アイデアは「輝く」というような表現であらうか。輝くアイデアを把えた時、つまり、我々の魂がアイデアに直面した時、我々の知性もまた輝くのである。⁽³⁸⁾あまりにも単純な話である。本当はこれですべてかもしれない。しかし、これだけでは、人々を納得させる訳にはいかない。自明とは、当人にしか明らかでないこと、という皮肉を思い出させるだけであらう。そこで、現象界には在り得ないアイデアについて、少しでも親切に語り聞かせようとする時、虚構が構成されざるを得ないのである。これは言論というものが元来虚構であるという理由によるものではなくて、日常的経験世界のものではないという、アイデア自体の在り方によってそうならざるを得ないのである。

プラトンがアイデアを作る、と言つてしまいたいところであるが、彼は自らの語りによってアイデアについての知を作り、アイデアとのかかり合いという新しい世界を構成して行くのである。彼にとって、實在の世界は事実上言葉の世界である。手近には存在しないものを想起しようとする人間の精神は、単なる経験の世界に閉じ込められてはいない。精神ははるかに食欲である。誤り多い虚構の冒険を試みながら、百に一つの望みを抱いて、ものの根源に迫ろうとする。言語活動・著作は、このような人間精神の能動的姿勢の現われである。こうしてプラトンはアイデアに向つて一切を作りかえて行くのである。

模倣の更に模倣、實在からへだたること三番目の文章も存在するが、多くのすぐれた文章と同じく、プラトンの文章は「更に」という所で折り返されて、生きた言葉と書かれた言葉は重なり合っているのである。不完全な現実を突き破つて価値の転換を唱道する文章はそうでなければならない。影が二重になっている。しかも、プラトンが故意に被膜を重ねて實在をかくした訳ではない。しかも、彼が作つた影は本当は一重である。生きた言葉と書かれた言葉との区別は、さほど深刻なものではない。生きた言葉は単なる話し言葉ではなくて、哲学の求める知であり、アイデアへ迫ろうとする知的模索そのものであり、それが語られたり文字に記されたりするにすぎない。知り得、表現し得る限りのものは語られ書かれる。

文字崇拜に対してプラトンは水を指している。つまり、書物は記憶力を弱める、読む者の疑問に應えてくれない、書物の側から適切な相手（読者）をえらぶことができない、といった諸点である。⁽³⁹⁾このうち、プラトンを読む者として直ちに気になるのは、問いかけても書物は答ええないという点である。しかし、これは書物の値打ちにはかわりがない事である。実際にプラトンと対話できれば——生きた言葉の発現の場としての対話に参加できれば——問いかけて対して何らかの答えを得られるであらう。だが、この場合も、答えを見つけ出す全責任は我々の側にある。なぜなら、知るとは想起であり、自力で内省的に掘り起こす事だからである。⁽⁴⁰⁾書物の方は無言で答えるプラトンであるだけ

のことと考えればよい。プラトンの書は読者を対話の中に引き込んで、共に考えさせる力をそなえている。声咳に接するの感をいささかも持たずにプラトンを読む人、読みつつ彼の風貌姿勢を感じない人、こういう人を私は想像することが出来ない。また、書物は読者をえらぶことが出来ないのは当然だが、プラトンは些細なヒントから自力で発見する能力を持つ少数の読者に対して期待をつないでいる。⁽⁴¹⁾ そういう少数者こそ真にプラトンの読者であり、対話の相手であろう。書物は影のまた影ではない。プラトンは一重しか影を作らない。

ただの一重であってもそれが影・虚構であつてはいけなないのであるか。そうではない。むしろプラトンは詩人に警告して、真実をそのまま語ってはいはならないと⁽⁴²⁾言う。そのプラトンが自ら虚構を実践しなかった筈がない。彼は模倣の不完全さを逆手にとって虚構を以って真実を告げようとするのである。真実は虚構よりも奇、なのではない。すぐれた文芸にはこの転倒がある。プラトンが知り得なかった東洋の、それも極く短い例を一つ挙げてみよう。

百宝装腰帶

真珠絡臂鞆

笑時花近眼

舞罷錦纏頭

宝珠を帯して少女が舞う、舞いつつ時に笑顔を見せる。その時、庭に咲き誇る花が少女の眼元に引きよせられる。しかし、現象界においては（と哲学の殺風景な説明をつけるまでもなく）花が動く筈はない。この杜甫の詩の「笑いし時は花の眼に近づく」について、吉川幸次郎氏は「わが言葉によって新しい自然を作りあげようとする杜甫の気力」の現われと言われた。⁽⁴³⁾ プラトンもまた、感覺的事物の手応えを敢て拒否して、アイデアをもって真の實在となす転倒を行い、アイデアを志向すべき新しい世界を説こうとした。

注

- (1) Epist. Z. 341 c 4-6. cf. Epist. B. 314 c 2-3.
- (2) Phaedr. 276 c 7.
- (3) Aristox. Harm. 2. 30. 16-31. この講義が「不文の教え」を研究する重要な手がかりになっている事は言うまでもない。
- (4) Praedr. 258 d 1-5.
- (5) 私は不用意な約束のために書く。なるべく短簡に書いて、せめて分量の点でプラトンの叱りを軽減させるつもりである。
- (6) Phaedr. 258 e 1-2.
- (7) ibid. 269 e 4-270 a 1. *ἀδολεσχία καὶ μετεωρολογία* という語には、哲学的議論に対する皮肉の意も含まれていると思われる。
cf. G. de Vries; A commentary on the Phaedrus of Plato, ad loc. cit. プラトンの文章を字面通りに受け取る事に対しては、たえず用心をしなければならぬ。
- (8) F. M. Cornford; *Thucydides, Mythistoricus*, p. 138.
- (9) R. G. Bury; *The Symposium of Plato*, XXXV.
加藤信朗「書かれた言葉と書かれぬ言葉」(哲学雑誌七四卷七四二号)
- (10) J. D. Deniston; *Greek Prose Style*, p. 7, p. 41.
- (11) Soph. 260 a 5-7.
- (12) Phaedr. 275 e 1-5.
- (13) 我々が多くの注釈書を調べて探し求める意味を、プラトンの時代の読者ははるかに容易に理解した事であろう。しかし、問題はそこにあるのではなくて、プラトンの著作は或る限られた範囲の読者を想定して書かれていられる点で、言葉使いや内容そのものから十分に察しられるのである。cf. Epist. Z. 341 e 1-3. また、現今の出版事情とは異なり、当時の書物は、小さな仲間の集りの前で朗読するために書かれたという事にも注意しなければならない。プラトンの作品を戯曲の台本として、ローマの人々は上演したと言われているが、これは必ずしもプラトンの作品に対する適切な処遇ではないであろう。思想を文字に定着させ、文字の解釈を通して更に思想を展開させる文学の道を、プラトンは承知しているのであろう。
- (14) Phaedr. 275 c 6-7.
- (15) ibid. 276 a 8-9.

- (16) フラトン は当時世上の話題となっていたテーマを取り上げて、自己流に意味をすりかえている。加藤信朗氏の前掲論文参照。
de Vries の前掲注釈書のお世話になったが、276 a 1-2 λόγον τούτου ἀδελφόν, γνήσιον. に注して、The spoken λόγος, of which the written λόγος is the illegitimate brother. としているのは明らかに誤解である。
- (17) Phaedr. 276 a 5-6.
- (18) ibid. 276 c 3-4, e 1-3.
- (19) ibid. 276 e 4-7.
- (20) ibid. 276 e 1-3.
- (21) ibid. 276 a 9. εἰδωλον という語には軽蔑的な意味しかないとは限らない。
cf. de Vries, op. cit.; ad loc. cit.
- (22) Symp. 211 a 7.
- (23) ibid. 211 b 1-2.
- (24) ibid. 210 e 4-5.
- (25) Phaedr. 250 b 6, d 1, Alc. I. 134 d 5, Phaedo 110 c 2.
- (26) Resp. 476 c 9-d 3. Jowett, Campbell (Plato's Republic, vol. III. p. 257) は ἡγεῖσθαι=νομίζειν とわきまを注している。
νομίζειν の意として、Burnet (Euthyphro, Apology and Crito, p. 15, p. 104-5, p. 111) が示唆に富んだ注を残している。と
いって、Resp. 479 a 2-3 に見える ἡγεῖται…… μὲν……,…… δὲ…… νομίζει などとはどう解すべきなのか、ついにわからない。
- (27) Symp. 210 d 4, Resp. 453 d 5-11, Prot. 338 a 5-6.
- (28) Phaedo 80 a 10-b 5.
- (29) Epist. Z. 342 a 7-d 3 には、円と呼ばれるものがある時、次の五つが指摘されると言われている。即ち、(一)円という名前、(二)円
についての定義、(三)現実描かれた円、(四)円についての知識、(五)円のイデア。このうち、(一)は主語と述語(という言葉)の結合であ
るから、とりあえず(一)と(二)を合せて言葉と概括することにする。第七書簡のこの分類には魂は出て来ないけれども、言葉と知識が魂
の存在を含意している。342 c 4-d 3 には、知識が魂の中にあることと、イデアに最も近いものであることが指摘されている。言葉
について『クラチエロス』に不可解な一節がある。Crat. 390 a 5-6 の「各々のものに相應しい名前のエイドス」と言われている前
後である。τὸ τοῦ ὀνόματος εἶδος は他の対話篇の叙述にうまく合致しない。また、この対話篇では言葉・音楽・絵画・身振りを列

記言及している (Crat. 423 a 6, b 9-11, c 11- d 2, d 8-9)。これらは人間の有するシムボル体系であつて、これらについてのプラトンの見解を是非知りたいのであるが、私はつまづいてしまった。

- (30) Epist. Z. 343 a 1.
- (31) Resp. 377 d 5-6. *μύθους ψευδεῖς συντιθέμενες*
- (32) Nomoi 663 d 6-e 2.
- (33) Resp. 472 d 4-7.
- (34) ibid. 598 b 1 ff., 599 a 1-2.
- (35) ibid. 596 b 6-9, 598 a 1-4.
- (36) Epist. Z. 341 c 5.
- (37) ibid. 344 d 9-e 2.
- (38) ibid. 344 b 7.
- (39) Phaedr. 275 d 4-e 5.
- (40) ibid. 275 a 4-5.
- (41) Epist. Z. 341 e 1-3.
- (42) Phaedo 61 b 3-4.
- (43) 新唐書選 (岩波新書) 十一頁。